

# 銚子市栗島台遺跡採集の玉斧

## －遺跡2例目のヒスイ製品の紹介－

小林 清 隆

### はじめに

千葉県の北東端である銚子市に所在する栗島台遺跡は、「犬吠埼に向かって伸びる下総台地の東端付近、南に向かって突出する標高 10m～15mの舌状台地（栗島台）上と、台地を取り囲む低湿地に立地する」（千葉県教育委員会2021）。遺跡周辺を第1図に示した。いわゆる銚子半島のくびれ部の中央から南、やや太平洋側に寄って栗島台遺跡が位置している<sup>1)</sup>。

銚子市史によれば、遺跡の発掘は1933年の好古家吉田文俊氏による「乱掘」を嚆矢とするようである（篠崎編1981）。この昭和初期の発掘成果は公表された形跡が無く、文献に登場するのは、酒詰仲男氏による「下総国小川町貝塚発掘略報」である（酒詰1942）。略報の記述では、発掘は1940年3月に行われ、打製石斧ほか石器類や土器片422点などの成果があったとされる。なお、この報告においては、「銚子市小川町淡島台」に所在すると記載されている。

1949年には國學院大學による本格的な発掘調査が実

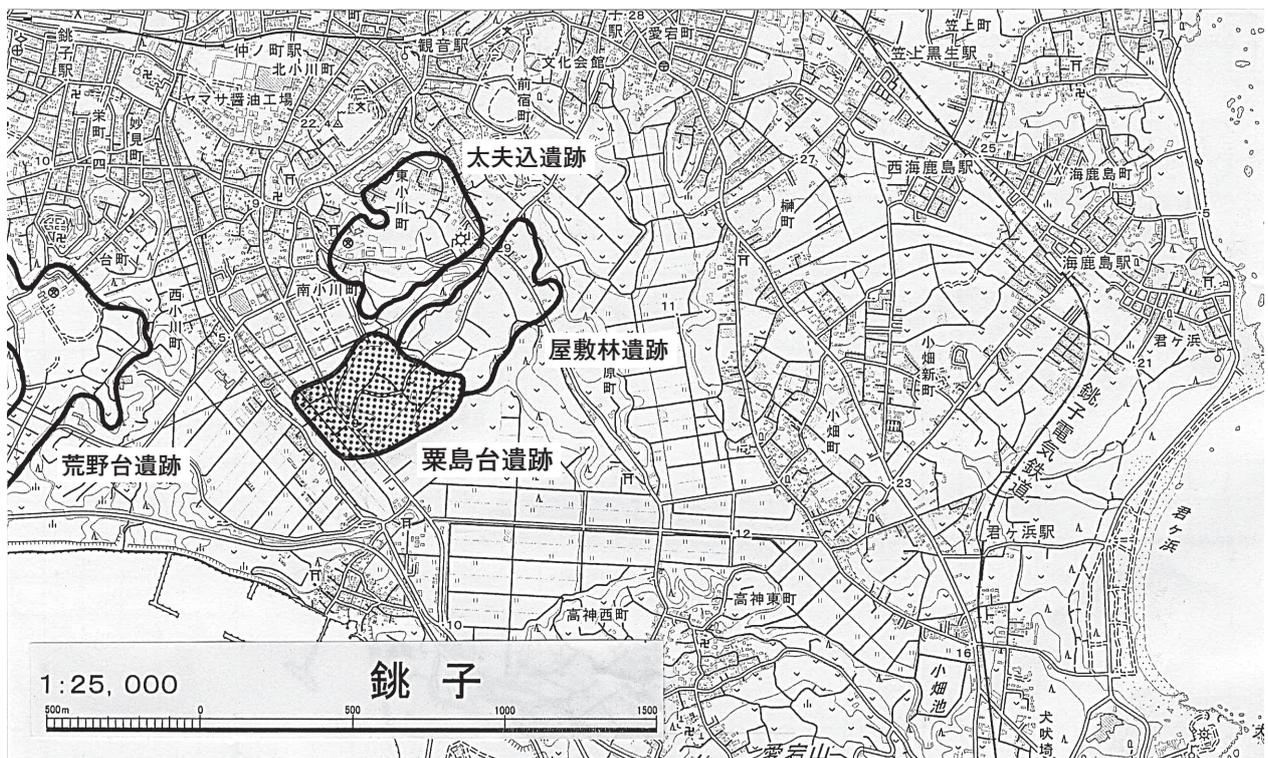
施され、多くの自然遺物や人工遺物が検出され、なかでもコハク製品の存在が注目された（大場ほか1952）。そのコハク製品は、野口義磨氏が報告とは別に紹介を行っている（野口1952）。以来、数回の発掘が行われ、前期～中期にわたる遺物や遺構が発見され、地域の重要な遺跡であることが鮮明になってきている。

最近では、遺跡の地権者の一人である横田清隆氏が、長年にわたり採集した玉類の一部が紹介されるなど<sup>2)</sup>、資料化が進んでいる（横田・伊藤・藤田2021）。

今回報告するヒスイ製品も横田氏が採集した資料である。かつて栗島台遺跡のコハク製大珠<sup>3)</sup>を報告した伊藤陸憲氏からの情報提供を受け、筆者が知るところとなり、横田氏の快諾を得て紹介することになった。

### 採集したヒスイ製品

ここに紹介するヒスイ製品は、横田氏が2016年頃に自身の耕作する畑で発見し、自宅で保管していた資料である。筆者は、2022（令和4）年6月5日に横田氏



第1図 栗島台遺跡と周辺の遺跡



『千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書』から転載

第2図 玉斧採集位置



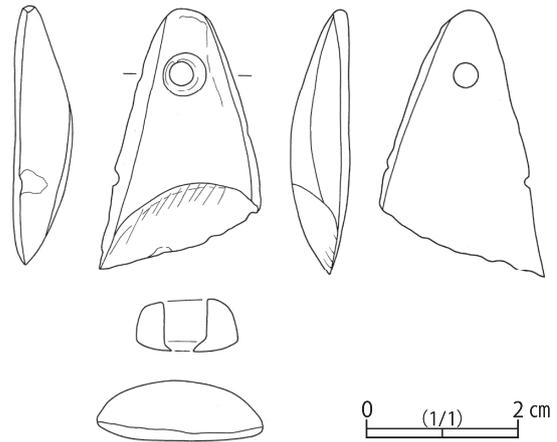
第3図 遺跡近景

の自宅で実見し、同年6月23日に写真撮影と実測を行った。採集地点は第2図の★印付近になるとのことである。

第4図・第5図が採集品である。素材は第5図の写真のとおり、やや淡い緑が全体に溶け込むような発色を放つ、透明感のあるヒスイである。形態は第4図に示したように、基部から下部に向かって広がっていき、下端部に斜刃が作出され、研磨され先端の鋭さが際立っている。本来、定角式磨製石斧状であって、後に斜刃とした可能性もあるが、経年の表面風化で明確にはならない。縦断面は中央部に最大厚を持ってレンズ状となり片刃である。孔は基部からやや下に片側から穿たれ、形状は円筒状である。開口部に擦れた痕跡は認められない。保存状態は比較的良好であるが、左側面に後世につけられたガジリがみられる。また、刃部先端部が微細な鋸歯状となる。長さ35.0mm、幅20.5mm、厚さ7.0mm、重量7.88gである。

特徴を再度下記にまとめておこう。

- ① 良質なヒスイを素材にしている。
- ② 定角式磨製石斧状の形態に近似する。
- ③ 刃部は片刃で斜刃を呈する。



第4図 玉斧実測図



第5図 玉斧写真(約1.5倍)

- ④ 長さ35mmと小型である。
- ⑤ 基部の端部付近に孔を穿つ。
- ⑥ 穿孔は片側から行われる。

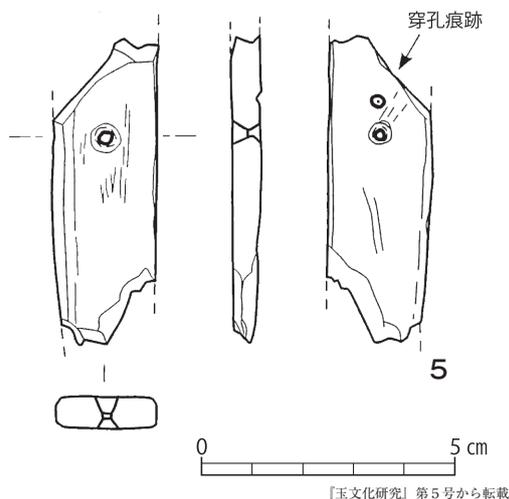
以上のような特徴を持つことから、本資料は「玉斧」と呼ばれる部類になるだろう。玉斧については、長崎元廣氏による論文が知られており、今日においても基本的な文献になっている(長崎1984)。長崎氏の分類に基づけば、B類とされたものにもっとも近い形態となろう。即ち、「定角状磨製石斧に似た形態で、基部近くに孔を有するもの」であり、さらにB2類と細分類されたものに近い。B2類とは、「小形の定角状磨製石斧に最も近く、基部よりも刃部がはるかに幅広く、撥形に近いもの」で「全体に小形にしたもの」とされる。長崎氏の分類では、定角式磨製石斧を基本形態に置いていることから、刃部の形態が丸刃であり、斜刃となる本例は、厳密に言えば別の類型にするべきかもしれない。また、小形の範疇をどう捉えるかなどの検討も残されるが、B2類から大きく逸脱しないと考えられる。したがって、本例は長崎分類の「玉斧」B2類と呼んで問題はないといえる。

## 粟島台遺跡のヒスイ製品

今日まで実施された粟島台遺跡の調査で、発掘により検出されたヒスイ製品は存在しない。ただ、ここに紹介した玉斧と同様に、表採によるヒスイ製品が1点存在することが知られている。それは『上代文化』第22輯（大場1952）や、『銚子市史』（篠崎1981）に記載された、銚子考古学同好会の常世田忠蔵氏が採集された「径三厘の円形完全品、中央近くに有孔の磨製品」である（篠崎1981）。筆者はこの資料は未実見のままであるが、伊藤陸憲氏撮影の写真からは、黄緑色に発色する透明感のある良質なヒスイを素材にしているとみえた。直径3cmと小型になるが、いわゆる根付形の大珠になろう。

さらに、すでに報告された玉類の中に、「硬玉製垂飾」とされるものが1点存在する（横田・伊藤・藤田2021）。第6図に挙げたこの垂飾は、黄味黄緑を示し「硬玉製大珠の分割再利用品の可能性がある」と推測されている。ただ、比重が2.8であることや、実見して感じた質感は、明らかに上記2点とは異なる。ヒスイとは違う石材と判断して、玉斧を粟島台遺跡の2例目のヒスイ製品とした。

根付形大珠と玉斧の2点のヒスイ製品は、どちらも表採品のため帰属する時期を明確にすることはできない。遺跡の営まれた時期から推測すれば、中期後半に搬入されたものとして大過ないであろう。



第6図 垂飾実測図

## 謝辞

このたびの資料紹介に当たり、遺物を採集され保管されている横田清隆氏には、発表について快諾をいただき、お忙しいところ遺跡において、採集地点についてご案内いただきました。お礼申し上げます。また、資料の存在について連絡を下された伊藤陸憲氏に感謝いたします。

## 注

- 1) 第1図の地図は、国土地理院著作発行の、平成28年8月調整1:25,000『銚子』の一部を改変して使用した。また、周辺の遺跡は、(財)千葉県文化財センター1993『千葉県埋蔵文化財分布地図(2) -香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)-』を参考にした。粟島台遺跡の北東側に接する屋敷林遺跡は、早期・前期の遺跡であり、北側に対峙する太夫込遺跡は早期・前期・中期の遺跡である。西側に立地する荒野台遺跡からは前期・中期の遺物が出土している。
- 2) 『玉文化研究』第5号(横田・伊藤・藤田2021)では、珞状耳飾2点、管玉2点、垂飾1点が紹介されている。いずれも横田氏が粟島台遺跡で採集した石製品である。
- 3) 伊藤陸憲氏は、長年にわたり粟島台遺跡の踏査を実施しており、1966年にコハク製の玉斧を発見し、1982年の『考古学雑誌』において発表している(伊藤1982)。また、それに先駆けて、市立銚子高校の歴史クラブ発行の冊子で写真による紹介が行われている(銚子市立銚子高等学校歴史クラブ1979)。さらに同氏は、粟島台遺跡の最初の発掘を行った吉田文俊氏について追究し、発掘した年が1943年であったことを突き止めている(伊藤1994)。

## 引用・参考文献

- 伊藤陸憲 1982「千葉県粟島台遺跡発見の「琥珀製大珠」」『考古学雑誌』第67巻 第4号 日本考古学会
- 伊藤陸憲 1994「粟島台遺跡と吉田文俊」『宇奈加美』第2号 宇奈加美考古学研究会
- 大場磐雄ほか 1952『上代文化』第22輯 國學院大學考古学会 マンガ銚子の歴史刊行会 2021 復刻版
- (財)千葉県文化財センター 1993『千葉県埋蔵文化財分布地図(2) -香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)-』
- 酒詰仲男 1942「下総国小川町貝塚発掘略報」『人類学雑誌』第57巻第11号 日本人類学会
- 篠崎四郎編 1981『銚子市史』 原本1956年発行
- 滝田正俊 1965「銚子地方の古代遺跡」『銚子の自然』銚子市観光協会編
- 千葉県教育委員会 2021「粟島台遺跡」『千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書』
- 銚子市立銚子高等学校歴史クラブ 1979『文化祭目録 考古学から見た銚子の文化』
- 長崎元廣 1984「縄文の玉斧」『信濃』第36巻第4号 信濃史学会
- 野口義磨 1952「石器時代の琥珀について」『考古学雑誌』第38巻1号 日本考古学会
- 横田清隆・伊藤陸憲・藤田富士夫 2021「千葉県粟島台遺跡採集の玉類について」『玉文化研究』第5号 日本玉文化学会